



Title	不安な旅人 : ワシントン・アービングのインディアン論
Author(s)	飯田, 未希
Citation	待兼山論叢. 文学篇. 1997, 31, p. 17-29
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/47876
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

不安な旅人

— ワシントン・アービングのインディアン論 —

飯 田 未 希

ワシントン・アービング (Washington Irving, 1783-1859) が作家活動を行なった、初期アメリカ共和国は、近年の批評的動向の中で、不安の時代として捉えられることが多い。¹⁾ そして、アービングに対する批評も、彼の作品を時代の不安を何らかの形で反映したものとして読まれる傾向にある。²⁾ これらの批評では、アービングの自伝的な問題(破産、母親の死など)が、「時代の不安」(共和国的理想の崩壊、社会の市場化、などに由来するもの)と、彼のテキストを通じて結びつくものとされている。私自身も、アービングがイギリスで作家活動を再開した1810年代後半に、彼の生活がさまざまな不安に満ちたものであったことを否定するつもりはないが、彼の生活、テキスト、そして彼が生きた時代の全てを不安という言葉に回収してしまうことは、皮肉な見方をすれば、アービング、もしくはその時代の人々の無力さ、または無垢さを暗に強調し、帝国主義的な膨張を始めたアメリカというもう一つの(もしくはほかのさまざまな面の内の一つの)アメリカから目を逸らすものであるとも取れなくもない。この小論では、私は、アービングの不安をコンテクスト化するため、彼が収奪／喪失(dispossession)を美的に語る、その手法に注目したいと思う。この手法とは、喪失、故郷を離れた寄る辺なさなどをロマンチックに語ることで、植民者の植民地主義と、先住民の植民地化の歴史的な差異を効果的に隠蔽するというものである。³⁾ アービングは、一方でイギリスの遺産からの疎外を喪失として語

るが、他方、彼はアメリカ先住民の土地や生活の喪失も、彼らの出来事を歴史からロマンスへと移し変えることで美的なものとして語る。この二つの喪失は、どちらも当時のアメリカの文学や芸術でよく知られたものであるが、批評的に両者がリンクされたことはあまりない。⁴⁾ 私がここで示したいのは、この多くの批評家が時代の特徴として強調する「喪失の感覚」は、実際には彼らに多くを与えるものであったと言うことである。つまり、自分の不安定な地位の問題に捕われていた当時の作家は、彼らの喪失の感覚を書くことで、イギリスおよびアメリカの上品な読者にアピールしていたこと、そして、彼らにとって、インディアン「喪失」は、崇高で悲劇的なものとして、彼らが語るにふさわしい文学的主題となったのである。

『スケッチブック』(*The Sketch Book*)の最初の二編のエッセイは、この本(最初アメリカでは分冊形式で出版された)が、旅行記であることを読者に期待させるものとなっている。旅行記とは、すなわち、イギリスのさまざまな場所の印象が順番に並べられ、最後には書き手がアメリカへまた戻ってくるところで終わるという慣習的な形式である。この『スケッチブック』の旅行者／語り手であるジェフリー・クレイヨン(Geoffrey Crayon)はイギリスに「物語られた詩的連想の魅力」(“the charms of storied and poetical associations”⁵⁾)を求めて出かけることをまず強調し、イギリスへの船旅を次の「船旅」(“The Voyage”)で語る。しかし、この『スケッチブック』においては、そのような旅行記の自己と他者の安定した関係は築かれなことがわかる。まず、この旅行記は、最終的なアメリカへの帰還という構図を持っていない。そして、イギリスとアメリカの間で、揺れを繰り返すのである。まず、この「船旅」のエッセイでは、クレイヨンは、船員の「『陸地だ』というわくわくする叫び声」(“the thrilling cry of ‘land!’” [8])や、「約束の地」(“the land of promise” [9])という彼の印象を書き留め、イギリスへの到着を新世界の発見になぞらえ

るかのように語る。次の“Roscoe”では、リバプールでのクレイヨンの滞在が描かれ、旧世界と新世界の逆転という可能性はなくなるように見えるが、この両者は『スケッチブック』で何度も逆転され、また混同されている。

第四のエッセイ“The Wife”と次の“Rip Van Winkle”は、旅行記という形式を中断させる。両方のエッセイともアメリカを舞台としたものであるし、特に“Rip Van Winkle”は、読者の関心をイギリスの旅行者クレイヨンから、完全に独立以前のオランダ系植民地のアメリカへと移し変える。イギリスを舞台とするエッセイがまたすぐに語られ、これ以降22のエッセイではアイルランドやドイツなどで中断されるだけだが、このように早い時点でアメリカのエッセイが強調されることは、『スケッチブック』全体にアメリカへの関心が下敷きとなっていることを示唆し、旅行記という形式を掘り崩すものとなる。これは、アメリカに関するエッセイが、語り手をジェフリー・クレイヨンとしていないことにより、より強調されている。“Rip Van Winkle”とほぼ巻末におかれた“The Legend of Sleepy Hollow”という二つの元オランダ系アメリカ植民地（ニューヨーク）を舞台としたエッセイは、語り手を歴史家 Diedrich Knickerbocker としており、またインディアンのエッセイには、語り手が示唆されていない。このようなアメリカへの関心は、シェイクスピアに関するエッセイ（“Stratford-on-Avon”）と、それに続くインディアンに関する二つのエッセイ（“Traits of Indian Character”）において再び表面化する。そして、イギリスの田舎をもういくつかのエッセイで語った後、最後のエッセイ“L'Euvoy”の前で、再びアメリカを舞台とするエッセイが二編語られる。

「ストラトフォード・オン・エイボン」（“Stratford-on-Avon”）のエッセイで、クレイヨンはシェイクスピアの誕生の地を訪れる。彼は、ほかのエッセイと同様に、自分のイギリスへの（この場合はシェイクスピアへの）

崇拜を、滑稽化すると同時に、擁護しようとする。彼は、このストラットフォードで、全てのシェイクスピア縁りの場所を訪ねる。クレイヨンは、ルーシー家の領地(the Lucy estates)で、シェイクスピアのさまざまな登場人物を想像しながら、一日を過ごす。彼は、「自分の心が想像上の場所やその場所と結びついた登場人物に占められているため、自分が実際にその中で住んでいるように感じる。」(“My [his] mind had so completely possessed by the imaginary scenes and characters connect with it, that I [he] seemed to be actually living among them.”[268])そして、宿に戻ってきた彼は、シェイクスピアのことを、次のように思い出す。

On returning to my inn, I could not but reflect on the singular gift of the poet; to be able to spread the magic of his mind over the very face of nature; to give to things and places a charm and character not their own, and to turn this “working day world” into a perfect fairy land. [268]

クレイヨンは、シェイクスピアの「魔法」を強調するが、ここには、「魔法を広げる」詩人は、実際には二人いる。クレイヨンとシェイクスピアである。そして、アービングをクレイヨンとともに数えるとするならば、三人詩人はいることになる。このように、実際にはルーシー家の領地で豊かな空想を繰り広げたのは彼自身であるにも関わらず、彼は、ロマンチックに自分の力を否定するような立場をとり、全ての想像的な力をシェイクスピアに帰そうとする。これと同じことは、彼の語るインディアンのエッセイにおいても繰り返される。彼は、自分のアメリカ先住民の生活に対する自分のロマンチックな解釈を強調するのではなく、彼らの生活が本来詩的であることを強調するのである。すなわち、ヨーロッパ系アメリカ人の作家の媒介や、ヨーロッパ系アメリカ人の語り手の媒介が隠蔽されるのである。

クレイヨンが現実をロマンスに変える芸術の力を認識するが、しかし、彼はその能力を自分自身には認めないのである。

芸術とインスピレーションへの着目は、クレイヨンの所有への関心と奇妙な形で結びついている。この「ストラトフォード・オン・エイボン」のエッセイで中心となっているシェイクスピアの若き日の「密猟」の話は、根本的には所有についての話である。シェイクスピアがストラトフォードを追い出されたのは密猟、すなわち他人の所有物を侵犯する行為のためであり、その罰として、彼自身が彼の故郷を失うのである。このような故郷の喪失、家＝故郷を所有することが不可能であったことが、彼の劇場での活躍を始めさせるものになったということを、クレイヨンは強調する。そして、クレイヨンは所有の問題について、繰り返し瞑想する。実際、彼は、このエッセイそのものを、その所有の問題から始めている。

To a homeless man, who has no spot on this wide world which he can truly call his own, there is a momentary feeling of something like independence and territorial consequence, when, after a weary day's travel he kicks off his boots, thrusts his feet into slippers, and stretches himself before an innfire. [251]

クレイヨンは、この想像による「所有」を楽しんでいるが、彼の夢想は、部屋に戻るよう促すメイドの合図のノックによって、打ち破られてしまう。このように、クレイヨンは、彼の「家のない」(homeless) 状況の悲哀を、やや滑稽化している。この滑稽化は、彼の想像による所有が、現実の所有とは異なっていること、彼が実際には所有していないということを、対比的に示唆している。「ストラトフォード」の別のパッセージでも、また、クレイヨンは想像による所有について言及する。先の宿屋におけるクレイヨンの想像上の所有は、メイドの部屋に戻るよう促す合図のノックによって

破られたが、ここでも、この想像上の所有は、シェイクスピアの密猟談によって、限界が示唆されている。なぜなら、そのシェイクスピアの物語で、彼が他人の財産を自分が所有しているかのように現実に振舞うことによって、投獄されたことが読者に告げられているからである。

I delight in these hospitable estates, in which every one has a kind of property — at least as far as the footpath is concerned. It in some measure reconciles a poor man to his lot.... He breathes the pure air as freely, and lolls as luxuriously under the shade, as the lord of the soil; and if he has not the privilege of calling all that he sees his own, he has not, at the same time, the trouble of paying for it, and keeping it in order. [261-2]

このように、所有を想像すること、想像による所有は、現実には所有しないもののみに可能になるものである。このような想像による所有の典型をクレイヨンは、ストラトフォードを追放され、その地を「魔法」によって「妖精の国」に変えたシェイクスピアに見ている。この想像による所有により、シェイクスピアは、ルーシー家の領地や、イギリス全体の想像上の所有権を持つことになる。そして、より一般的にみて、クレイヨンのような財産を持たない人間が、財産を持つ人間よりも、比喩的に多くのものを所有することになるのである。アービングは、もちろん、彼が所有しない土地を、芸術的な表象を通して比喩的に所有することによって、彼の作品を作り上げている。イギリス、スペイン、そして西部などが、彼のそれらの土地との想像上の結びつきと、そこからの疎外を通じて、読者に身近なものとして提示されるのである。

この「ストラトフォード・オン・エイボン」の直後に、何の説明も、またほかのアメリカのスケッチに見られた、エッセイの由来に関する枠付け

もされることなく、「インディアンの性格の特色」(“Traits of Indian Character”)と「ポカノケットのフィリップ」(“Philip of Pokanoket”)が、この『スケッチブック』全体を支配するイギリスの牧歌的な雰囲気感を遮るようにおかれている。しかしながら、この設定や素材の違いにも関わらず、これらのエッセイもクレイヨンのロマンティシズムをイギリスのエッセイと共有している。「ストラトフォード・オン・エイボン」と同様、インディアンのエッセイは歴史がロマンティックに語り直されたものである。アービングは、インディアンの記録がほとんど残されておらず、過去に直接近づくことができないことを嘆き悲しむが、しかし、彼は同時に、それによって、過去を彼の想像によって作り直し、所有することを楽しむことができる。このため、彼はサー・ウォルター・スコットについて書くよりは、シェイクスピアを選び、アンドルー・ジャクソンの1812年戦争におけるクリーク族との戦争よりは、1675年のフィリップ王戦争を描くことを選ぶのである。そして「高貴なる野蛮人」言説が、『スケッチブック』においても、ほかの同時代の多くのテキストと同様に、アメリカ先住民を穏やかに絶滅へと追いやるのである。「狂気と絶望に駆られて」(“driven to madness and despair”[277])、アービングはインディアンが「地上から霧のように消えてしまう」(“vanish like a vapor from the face of the earth”[281])ことを予言する。彼はインディアンを「知性を持った存在」(intellectual being)であることを強調するが、彼の共感や賞賛は抽象的なものとどまっている。清教徒の歴史家が、「フィリップ王をあまねく不安の主題とした」(“Philip become a theme of universal apprehension”[292])のに対し、アービングは「その主題を詩人や歴史家のものとする」(“render... the theme of the poet and the historian”[300])のである。アービングは、フィリップ王を次のように紹介する。

He [Philip] was the most distinguished of a number of contemporary Sachems reigned... at the time of the first settlement of New England; a band of native untaught heroes, who made the most generous struggle of which human nature is capable; fighting to the last gasp in the cause of their country, without a hope of victory or a thought of renown. Worthy of an age of poetry and fit subject for local story and romantic fiction, they have left scarcely any authentic traces on the page of history, but stalk like gigantic shadows in the dim twilight of tradition. [235]

アービングは歴史的な記録が残されていないことを嘆くが、この欠如は、この引用が明らかにするように、彼の芸術的なチャンスを生み出すものでもある。ラーザー・ジフは「政治的な政策がインディアンの合法的な存在を、彼らの主権を剥奪した後に認めたように、文学的な表象も、インディアン文化を彼らの歴史を剥奪した後に初めて認めた」⁶⁾と指摘しているが、ここでアービングはまさに、インディアン歴史を剥奪し、インディアンの高貴さを賞賛することによって、彼らを「伝説の薄明」の中に移し変えるのである。

インディアンのエッセイは、これまで彼が語ってきたような、旅行者の瞑想の無害でピクチャレスクな対象、というイギリス像を打ち壊すようなものになっている。アービングは、イギリスの暴力や破壊、そしてインディアンに対してなされたさまざまな不正行為を容赦なく描いている。イギリスによるインディアンへの暴力の強調は、「ポカノケットのフィリップ王」において、フィリップを「故郷を愛した愛国者」(“a patriot attached to his native soil” [299]) という、アレゴリカルな地位を与えることによって更に強められる。フィリップは、このように、高貴なる野蛮人であると

同時に、模範的なアメリカ人ともなっている。フィリップへのアービングの形容は、国家的英雄ジョージ・ワシントンにもピッタリと当てはまるものである。アービングは、このように、フィリップを、彼らを征服するアメリカの国家的象徴へと置き換えてしまう。

しかしながら、フィリップはイギリス人とも共通性を持つものとしても提示される。彼は「君主」(monarch)であり、アービングは「ロイヤル・ポエット」(“A Royal Poet”) でジェームス一世を描いたのと同じ情感を込めて、フィリップを語る。クレイヨンは貴族政治に憧れており、それをアメリカでの設定においても、イギリスの設定においても、賞賛するのである。更に、フィリップやインディアンは、クレイヨンの夢想するイギリス人の「美的な貴族制」、すなわち、シェイクスピアに見られたような、想像による所有者という地位を共有するように見える。若き日のシェイクスピアの天才の中の「野性と破格」(“the wildness and irregularity”[258])が、彼の環境によって養われ、彼を「偉大な自然の詩人」(“a great poet of nature”[252])としたように、インディアンも、彼らの野性的で美しい環境によって、美的に形成されるように描かれる。そして、インディアンもまた、シェイクスピアと同様、詩人でもある。「インディアンの性格の特色」の題銘には、「酋長ローガンの演説」の一節が飾られており、またアービングはこのエッセイの中で名前の明らかにされていない酋長が、母の墓を白人入植者に荒らされたことを嘆く「美しく、単純で、また情感あふれる熱弁」(“beautifully simple and pathetic harangue” [275])を、かなりの長さで引用する。また、このエッセイは、「年老いた戦士」の自分たちの運命を見越した言葉の引用によって締め括られる(“We are driven back... our fires are nearly extinguished... we shall cease to exist!” [282])。

アービングの強調とは違い、ローガンや名前のない酋長や、同じく名前

のない「年老いた戦士」は、自然の美しさにつき動かされて語るのではなく、白人入植者の暴力的な行動につき動かされて語るのである。しかしながら、これらのインディアンの「弁舌」の『スケッチブック』の表象は、先住民の必要性よりは、ヨーロッパ系アメリカ人の必要性に供されている。アービングが、これらの弁舌を美的なものであるとみるのは、弁舌自体に自然の反響が単に感じ取られるからだけではなく、彼がそれらの弁舌に矛盾を感じ取るからである。そして、その矛盾は、政治的な言説から詩的な言説へと移し変えられることによって、崇高なものになるのである。この白人によって強制された状況で生まれる、インディアンの「自然な感情の発露」という矛盾は、アービングを含めた、初期共和国の多くの白人によって、美的なものとして高く評価された。それは、死に行く、もしくは降伏するインディアンの弁舌の流行⁷⁾や、自殺するインディアンのタブローの流行⁸⁾に見ることができる。アービングは白人のインディアンへの暴力を認識しているが、その認識は、彼のインディアンの「自然」の雄弁さに対する理解からは切り離されている。この矛盾が、彼の美的な喜びを強烈なものとするのである。

このような、同時期の流行と、アービングのインディアンを美的に語る手法を比較すると、白人の読者の美的な欲望と政治的な欲望は不可分であることがわかる。アーノルド・クラパットは、これよりやや遅い時期のアメリカ先住民の自伝の流行に言及して、白人が先住民によって自分自身の無垢を証明してもらう必要があったことを指摘している。そして、インディアンの不可避的な絶滅を語る、彼ら自身の声文は、彼ら自身の声で語られているように表現されていることが必要であったことを指摘している。⁹⁾ この、「話を語るアメリカ先住民」の存在は、白人のテキストに、イデオロギー的には必要であったが、同時にそれを掘り崩す可能性もあった。しかし、そのインディアンの語り手は「粹付け」されることによって、彼

らが語る内容は、彼らが語るという事実や、彼らの語る方法に比較すると重要ではなくなるのである。不当な仕打ちを受けたインディアンに同情することは、「倫理的というよりは、美的な感動」になるのである。¹⁰⁾

インディアンの言葉が白人の作家の作品に挿入されるとき、インディアンは『スケッチブック』のストラトフォードのエッセイで示された比喩的な所有や想像上の所有権を主張することはできない。詩的な所有も、物理的な所有も彼らには認められていないのである。物理的な剥奪は、クレイヨンやアービングやシェイクスピアに、芸術的な所有を可能にさせたが、この物理的な剥奪はインディアンの場合には、芸術的な所有の喪失に結びつけられている。アービングは、この連関をはっきりとみている。彼は「インディアンは世襲の領地を金銭尽くの、しばしば気紛れな戦争によって奪われた。そして、彼らの性格は、偏屈で、公平でない書き手によって中傷されてきた」(“[the Indians] have been dispossessed of their hereditary possessions by mercenary and frequently wanton warfare; and their characters have been traduced by bigoted and interested writers.” [271]) ことを、指摘している。インディアンの政治的な表現も、芸術的な生産も、白人の作家と出会うと、美的な領有によって包摂されてしまうのである。

このように、インディアンの美的な喪失と、クレイヨンやシェイクスピアに使われた美的な喪失の手法を比較すると、それらの相互関係の仕組みがわかる。イギリス最大の詩人にさえ、喪失の感覚を呼び起こすことにより、ロマンティックな言説は、クレイヨン（もしくはアービング）の言及する次元の異なった「喪失」の間の歴史的な差異を隠蔽するのである。アービングは、故郷を追い出されたために、崇高な芸術を生み出すことになったシェイクスピアのように、インディアンも彼らの土地が奪われたことにより、芸術的な豊穡さを得ることになると自分を慰めているように見える。

もし、インディアンが「彼らの父祖の土地で放浪者になること」(“becoming vagabonds in the land of their fathers” [287]) によって不幸であるとすれば、彼らはおそらく「放浪には、本来詩的な性質がある」(“the poetic temperament has naturally something in it in the vagabond” [258]) ために幸福であるかもしれない。しかし、もちろん、本当かどうか定かではない若き日のシェイクスピアの放浪と、自発的で、紳士的なアービングの放浪、そして強制されたインディアンの放浪はアービングのロマンティズムの外ではどのような比較可能性も持たないのである。

アービングは自分自身の喪失感覚と、インディアンの歴史的な収奪を美的に語ることで、アメリカ白人とインディアンを両方とも受動的な犠牲者として語った。このようなレトリックは、初期共和国の文学や、政治的な語彙として広く認められるものである。¹¹⁾ 初期共和国論で強調されるような、独立以降アメリカ人が抱えてきた不安は、彼らが土地を奪いつつあるインディアンに対する、自分たちの征服者としての立場を隠蔽するものであった。そして、ジェフリー・クレイヨンの自己卑下や滑稽化という、「不安」の表現としてよく知られた手法は、この植民地から独立した後の、そのような不安を語る言説の一部としてみることができる。クレイヨンが言うように、イギリスへの「恐れと崇拜」(“awe and reverence”) が彼の「気安さと自信」(“ease and confidence” [368]) を奪い去ってしまうものならば、彼は、同時に彼の気後れをジェフリー・クレイヨンという内気なペルソナを創造することで、芸術的な利点へと変えることができるからである。

注

- 1) Lawrence Buell, “American Literary Emergence as a Postcolonial Phenomenon”, *American Literary History* 4.3 (1992): 411-442.

Donald Pease, *Visionary Compacts: American Renaissance Writings in Cultural Context* (Madison: U Wisconsin P, 1987). など。この不安論と注の2に関しては次の本を参考にした。

Laure Jane Murray, "Going Native, Becoming American: Colonialism, identity, and American writing, 1760-1820" (Diss. Cornell U, 1993), pp.181-189.

- 2) Joy S. Kasson, *Artistic Voyagers: Europe and the American Imagination in the Works of Irving, Allston, Cole, Cooper, and Hawthorne* (Westport CT: Greenwood P, 1982); Jeffrey Rubin-Dorskym, *Adrift in the Old World: The Psychological Pilgrimage of Washington Irving* (Chicago: U of Chicago P, 1988).
- 3) 白人入植者と旧宗主国の関係については、Bill Ashcroft, Gareth Griffiths, and Helen Tiffin, *The Empire Writes Back: Theory and practice in post-colonial literatures* (London: Routledge, 1989). を参照した。
- 4) Murray, *ibid.*, p.189.
- 5) Washington Irving, *The Sketch Book of Geoffrey Crayon, Gent* (NU: Dutton, 1963), p.2. 以下この作品からの引用はこの版によりページ数のみを記す。
- 6) Murray, *ibid.*, p.192.
- 7) Larzer Ziff, *Writing in the New Nation: Prose, Print, and Politics in the Early United States* (New Haven: Yale UP, 1991), pp.158-159.
- 8) David Murray, *Forked Tongues: Speech, Writing and Representation in the North American Indian Texts* (Bloomington: Indiana UP, 1991), chap.3.
- 9) Arnold Krupat, *For Those Who Come After: a Study of Native American Autobiography* (Berkeley: California UP), p. 31.
- 10) Werner Sollors, *Beyond Ethnicity: Consent and Descent in American Culture* (NY: Oxford UP, 1986), pp.102-130.
- 11) David Murray, *ibid.*, p.36.

(大学院後期課程学生)